

バレエ・リュス100周年の今年、よみがえる『牧神の午後』
～珠玉の舞踊映像、マイケル・ジャクソンが愛した“クリスタル・ドリーム”～
芳賀 直子（舞踊研究家）

ハウステンボスに造られた摩訶不思議なクリスタル・ドリームは、ダンスという視点から見ても、予想を超えた、優れたアトラクションです。

牧神が見た夢として繰り広げられる冒険の世界は、現・モンテカルロ・バレエ団芸術監督ジャン・クリストフ・マイヨーの若き日の振付。彼の作品ならではの美しく、幻想的、そして上品なエロスが漂う世界が繰り広げられます。

ダンサーは、なかなか金賞を出さないことでも知られる(*)バレエ界の登竜門の一つローザンヌ国際バレエ・コンクールで見つけた逸材たち。彼らの確かな技術に基づいたマイヨーの振付こそが“クリスタル・ドリーム”の世界を子供だましではない、芸術的な世界に高めているといえるでしょう。

音楽はドビュッシーの『牧神の午後』を中心にレスピーギ『奇妙な店』を含めた3曲が用いられています。

この『牧神の午後』が初演されたのは1912年、その跳躍の高さで知られ男性スターのさきがけとしても知られる、天才ニジンスキーの初振付作品でした。ギリシアの壺絵と浅浮き彫りに想を得たという身体は正面、顔は横向き、そしてバレエにはない角ばった動きはそれまでのバレエの概念を覆す衝撃的な振付で、当時スキャンダルとなった作品としても有名です。その独特の腕の動きやポーズはマイヨーの振付にも多く取り入れられています。また最初に登場するヴィーナスのプリーツを多用した衣裳や岩のある風景などは初演の美術と衣裳を担当したバクストによるデザインが引き継がれています。

これを初演したニジンスキーがメンバーだったバレエ団はバレエ・リュス（フランス語でロシア・バレエ団の意味）でした。1909年から1929年まで存在し、ピカソ、コクトー、シャネル、ローランサンといった一流の芸術家たちが参加し、当時芸術は見られなくなっていたバレエを芸術として再生させたバレエ団でした。今年はその100周年に当たり、世界各国で様々な催しが開かれています。

その年に、この“クリスタルドリーム”がよみがえるのは素敵なめぐり合わせと言えるでしょう。

「クリスタル・ドリーム」は、ポップス界で希有な才能を持つダンサーであった、故マイケル・ジャクソンが自分の王国「ネバーランド」にも作りたいと願うほどに愛したアトラクションでもあります。彼は生前、ニジンスキーの「牧神の午後」をフェイヴァリットにしていたことでも知られているのです。

それに加え、作品全体のファンタジックな雰囲気、噴水と映像の不思議な融合、「牧神＝パーン」という好色だけれど憎めないキャラクター、それらが確かなダンスとしても一流だったことが彼をひきつけたのではないのでしょうか。

噴水の映像をたくみに組み合わせたこの作品は他に似たものがありません。似たものがないからこそ「見てください」としかいえないのです。私自身見に行くまで実際の舞台を想像するのは難しいことでした。

また、この“クリスタル・ドリーム”が上演される劇場はバレエ・リュスが活動した時代の特徴アール・デコ・モチーフに飾られた素敵な空間です。劇場の楽しみとは内容はもちろんですが、会場の楽しみも重要です。そうしたところにも目を向け、種も仕掛けもある不思議な“クリスタル・ドリーム”の世界を楽しんで下さい。

(*)その金賞を受賞した唯一の日本人が熊川哲也氏です。

